

令和 6 年 5 月 7 日現在

機関番号：12601

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2020～2023

課題番号：20K02261

研究課題名(和文)聴覚障害の親と健聴の子ども(CODA)における支援プログラムの開発

研究課題名(英文)Evaluation of a Support Program for CODA and Deaf Parents

研究代表者

中津 真美(Nakatsu, Mami)

東京大学・バリアフリー推進オフィス・特任助教

研究者番号：90759995

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,300,000円

研究成果の概要(和文)：聴覚障害の親をもつ聴者の子ども(CODA)は、幼少期から親の通訳を担い、固有の親子関係課題を呈することが指摘される。本研究では、親子課題2領域(CODAの心理課題/親子関係課題)と支援ニーズ構造3領域(CODAの自己理解/親のCODA理解/支援システム)を明らかにした。次いで当該資料を基に、集合型の親子の支援プログラム(CODA版/親版)を開発した。CODA版では、自己の気づきと理解をもとに親子関係を見つめ直す機会として、親版では親がCODAの心理状況を理解し、自身の子育てを内省する機会として有効性が評価された。CODA当事者を協力者に充て、ガイドブック等各種コンテンツも制作された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

ヤングケアラーに関しては、わが国においても多面的な組織的支援が実施されはじめている。CODAに対しても、科学的根拠をもった支援プログラムを開発することができ、固有の課題とニーズに即した支援の第一歩が可能になる。

今後、我が国におけるヤングケアラーの支援方策は、ケアごと等により細分化され検討がなされていくことが推察され、本研究はその第一事例となってヤングケアラー支援の可能性を広げる一助となることが期待される。

研究成果の概要(英文)：CODA is responsible for interpreting for their parents from an early age. This suggests that they have unique parent-child relationship issues. In this study, we identified two domains in parent-child issues (psychological aspects of CODA/parent-child relationship) and three domains in support needs structure (self-understanding of CODA/parent understanding of CODA/support system).

Subsequently, a group-based support program (CODA version/parent version) was developed. The CODA version proved to be effective as an opportunity to re-evaluate the parent-child relationship based on self-awareness and understanding. The parent version was effective in helping parents to understand the psychological situation of CODA and to reflect on their own parenting. Various contents such as guidebooks were also produced. It is anticipated that future support tailored to CODA will be possible.

研究分野：聴覚障害学

キーワード：CODA コーダ 聴覚障害者 親子関係 ヤングケアラー 情報保障 障害者支援 家族支援

## 1. 研究開始当初の背景

### (1) CODA の通訳の役割

近年、高度の聴覚障害のある児者の社会活動において、合理的配慮の観点から、通訳者派遣制度などの情報保障とコミュニケーション支援が整備されるようになった。しかし、聴覚障害のある人の家庭に関しては、幼少期から聴覚障害の親をもつ聴者の子ども（Children of Deaf Adults ; CODA）が親の通訳を担う実態が知られる（Preston, 1994）。

CODA の通訳とは、親と第三者との間に立ち、双方の言葉を訳して相手方に伝えるだけでなく、第三者の話す内容が親には理解しづらい場合には、分かりやすい言葉に言い換えたり解説を加えたりする役割も期待される。さらに、CODA は固有の価値観や行動様式をもつ親と聴者との間のギャップを認識し、聴者社会との仲介役となることもあると指摘されている（Shingleton, 2000）。

### (2) 通訳の役割に基づいた親子関係

CODA の親子関係に関して、CODA の通訳の役割が適切な文脈の中でなされる場合には、その責務から成熟観や独立心が促され、CODA の成長の促進要因となり両親との緊密な関係の構築も進む一方で、通訳が CODA にとって過度の責任ある場面であれば、CODA は親を擁護し、parentified child（親のように振る舞う子ども）の様相を呈することが事例的に報告されている（Hadjikakou, 2009）。一方で聴覚障害のある親は、聴者社会の情報を有する CODA に様々な物事の決定を委ねる傾向にあるともいわれ（Bunde, 1979）、親子の関係性は一層、複雑になることが推測される。

このような固有の親子関係への指摘は、決して一般の親子関係と同様の問題として看過すべきではない。Young carer に関しては、英国では、本人および家族成員に対してカウンセリングや情報提供など多面的な組織的支援が実施されている。CODA に対しても Young carer と同様に、背景にある CODA 固有の状況を考究し、CODA と親のための支援プログラムを開発して親子の実生活・実社会に還元させることが喫緊の課題と考える。

## 2. 研究の目的

本研究では、固有の親子関係課題に即した CODA 版と親版の 2 種の支援プログラムを考案し、諸課題解消の効果を評価することを目的とする。なお、支援プログラムは、対面またはオンラインでの当事者集合型とし、全国各地で実践運用可能な形にて構築する。

### 【研究 1】親子の課題および支援ニーズの構造検討

親子の課題および支援ニーズを質的に抽出し、その構造を明らかにする。

### 【研究 2】支援プログラム開発

研究 1 の結果をもとに支援プログラムを考案して実践的検討を行い、その効果を検証し、CODA と親の課題とニーズに対応可能な内容に精緻化させる。

## 3. 研究の方法

### 【研究 1】親子の課題および支援ニーズの構造検討

親子の課題および支援ニーズの構造を明らかにするため、質的に検討した。具体的には、①研究代表者らの先行研究（主に CODA の親子関係構造、科研費研究 15H06123/親子関係の類型化、科研費研究 17K04197）および「ヤングケアラーの実態に関する調査研究報告書」（2019）を含む国内外先行研究をレビューし、②キーワードを抽出して質的にカテゴリー分類し、CODA の各発達段階における固有の「親子課題と支援ニーズの構造」を生成した。次いで、③前述の②の結果について、研究代表者と聴覚障害学を専門領域とする研究者計 8 名により、内容妥当性に関するメンバーチェックを行った。

### 【研究 2】支援プログラム開発

#### (1) 支援プログラムの考案

CODA 版と聴覚障害のある親版の 2 種の支援プログラムについて、当事者が研究プロセスに関与する inclusive research（Nind, M. 2017）の手法を用い、聴覚障害学領域の専門家 8 名のほか、CODA と聴覚障害のある親の当事者 3 名を加えて計 11 名を検討メンバーとした。研究 1 にて生成した「親子課題と支援ニーズの構造」を概念的枠組みとして、2 種の支援プログラムそれぞれの内容を検討した。

#### (2) 効果測定のための質問紙

CODA に対して、a) 属性 9 項目（初回のみ）、b) 心理的状況 17 項目、c) 自由記述 1 項目（最終回のみ）の計 27 項目の質問紙とした。支援プログラムの初回と最終回に、メールにて回答を依頼した。親に対しては、実践事後に支援プログラムを体験した感想に関する自由記述を求めることとした。

質問紙回答は、項目の得点平均点を算出して、実施前後について統計的に比較した。自由記述は、意味内容のまとまりごとに分類し、各カテゴリーを命名した。

#### 4. 研究成果

##### 【研究1】親子の課題および支援ニーズの構造検討

CODAの親子における課題の構造では、「親の課題解決の代理機能を伴う高度な役割」に伴うCODAの心理的課題と、「通訳の役割期待」に基づく回避または役割逆転の親子関係課題の2カテゴリーに大別された。支援ニーズの構造では、I. CODAの自己理解に向けたニーズ、II. 親のCODA理解のニーズ、III. 支援システム構築のニーズを指摘できた。

##### 【研究2】支援プログラム開発

###### (1) 対象者

①CODA版：参加対象者は、支援プログラムへの参加を希望した20代CODA群8名（平均年齢22.9±3.0歳）と40代CODA群4名（平均年齢45.3±3.6歳）の計12名とし、全員が両親ともに聴覚障害であった（うち2名は、両親以外にも聴覚障害の家族構成員あり）。

②親版：参加対象者は、支援プログラムへの参加を希望したCODA子育て中の両親（またはどちらか一方の親）9組とした。

###### (2) 支援プログラム構成

①CODA版：研究1の結果から、CODAである自己を内省して理解する作業に主眼を置き、事前と事後のオンライン上での個別活動が各1回と、対面集合型が1回、オンライン集合型が1回の計4回とした。

事前活動では、本研究の趣旨を書面で説明したうえで、支援プログラムコンテンツ（①CODAスピーカーガイドブック～CODAが社会に向けて体験を発信するために～、②安心して発信するために、③自分のことを話してみよう）を熟読したうえで、以下(3)の質問紙に個別に回答する内容とした。コンテンツは研究代表者と成人したCODA2名とで制作した。なお、当支援プログラムは、患者スピーカーズ研修（香川, 2017）およびヤングケアラー・若者ケアラースピーカー講座（一般社団法人日本ケアラー連盟）の内容を援用し、CODAスピーカー講座と名付けた。次いで対面集合型では、CODA当事者による講義のあと、グループワークにて自己を内省する時間を設け、最後に参加者ひとりひとりが全員の前で10分間スピーチをする形式とした。初回の質問紙への回答をもとに、参加者個別の心理的状況等に関するレーダーチャート（Fig. 1）を資料として作成して、グループワークの助けとした。なお、グループワークは、40代CODA群の参加者をファシリテーターに充て、進行表にて手順を明確にして行われた。その後のオンライン集合型では、きこえない親を対象に自身の体験を発表したり、ディスカッションしたりする形式とした。これらの集合型は、いずれも4時間とした。事後活動では、個別に質問紙に回答し、これまでの活動を振り返る内容とした。

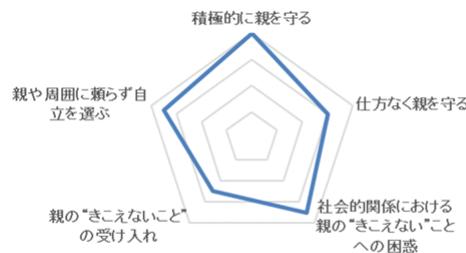


Fig. 1 レーダーチャート見本

②親版：研究1の結果から、親がCODAの心理的状況を理解する作業に主眼を置き、事前と事後のオンライン上での個別活動が各1回と、オンライン集合型が1回の計3回とした。事前活動では、CODAへの質問事項をまとめる作業とし、自身の子育ての現状を見つめ直し、将来の見通しを立てながら検討してもらった。次いでオンライン集合型では、青年期のCODA2名の話聞いたあと、事前質問をもとにCODA11名とともにディスカッションをする形式とし、情報保障として手話通訳と文字通訳を付した。事後活動では、自由記述に感想をまとめる作業とした。

###### (3) 質問紙作成と支援プログラムの効果

質問紙は、CODA版でのみ実施した。研究1の結果をもとに、心理的課題として「社会的関係における親の“きこえない”ことへの困惑」「親の“きこえない”ことの受け入れ」「親や周囲に頼らず自立を選ぶ」の3カテゴリーと、親子関係課題として「積極的に親を守る」「仕方なく親を守る」の2カテゴリーの枠組みにて構成した。回答は4件法（あてはまらない/どちらかといえば、あてはまらない/どちらかといえば、あてはまる/あてはまる）とした。

Table1に、各カテゴリーの平均点（4点満点）を単純集計して前後で比較した結果を示した。P（ポジティブ）カテゴリーである「親の“きこえないこと”の受け入れ」「積極的に親を守る」が最終回に増加し、N（ネガティブ）カテゴリーの「社会的関係における親の“きこえない

Table. 1 支援プログラム初回と最終回における質問紙得点平均値と得点差 n=12

課題	カテゴリ	P/N	項目数	初回		最終回		初回/最終回の差
				平均値	1 SD	平均値	1 SD	
心理的課題	社会的関係における親の“きこえない”ことへの困惑	N	4	2.25	1.36	2.21	2.12	-0.04
	親の“きこえない”ことの受け入れ	P	4	2.88	1.34	2.97	1.26	0.09
	親や周囲に頼らず自立を選ぶ	P/N	4	3.19	1.36	3.35	1.10	0.16
親子関係課題	積極的に親を守る	P	3	3.31	1.41	3.36	1.27	0.05
	仕方なく親を守る	N	2	1.63	1.38	1.79	1.20	0.16

\*P=ポジティブ、N=ネガティブ

い”ことへの困惑」が弱化し、支援プログラムの効果が伺えた。Nカテゴリーの「仕方なく親を守る」の平均点が増加したことについては、支援プログラム参加により幼少期から当然と認識していた自身の環境を見直し、無意識に抑制していた負の感情に気づく契機を得た結果ではないかと考察した。但し、いずれも統計的有意差は認められなかった。なお、各項目の得点平均点は、20代CODA群と40代CODA群との間でも差はなかった。

#### (4) 自由記述からみた支援プログラムの効果

①CODA版：事後質問紙の自由記述に対する質的分類では、5つのカテゴリー（①エンパワメントされる機会、②CODAである自己の気づきと理解の機会、③他の仲間との出会いの機会、④ネガティブ感情払拭の機会、⑤親子関係を見つめなおす）が見出された（Table2）。いずれも、ポジティブと捉えてよいカテゴリーであった。支援プログラムCODA版では、CODAである自己を理解する作業を通じて、親子関係を見つめ直し、親子の諸課題を解消することを目的としていたが、集合型にしたことで、他の仲間との出会い自体にも価値が置かれ、仲間にエンパワメントされてネガティブ感情が払拭されるといった効果も見出された。

Table.2 支援プログラムの感想：自由記述のカテゴリー分類（CODA）

No.	カテゴリー名	代表的な記述
1	エンパワメントされる機会	・ 生まれて初めて自分以外のコーダの方と関わることができて、力をもらいました。
2	コーダである自己の気づきと理解の機会	・ 他のコーダの体験や価値観を知ることで、自分との違いや似ている部分を認識し、それによって自分自身の輪郭がはっきりしていった感じです。 ・ 改めて自分の気持ちを再確認したり、言語化したりする中でこういった経験はなかなか他の場所では出来にくいものですし、間違いなく自分の財産となりました。
3	他の仲間との出会いの機会	・ 同じCODAの方々様々な視点が知れてとても勉強になった。 ・ 大人のコーダが優しく見守ってくださったこと、そして今なお、変わらないものがあると共有し、共感してくださったことが非常に心の支えとなりました。
4	ネガティブ感情払拭の機会	・ コーダの中でも自分がどのような立ち位置にいるのか知る機会となり、これまで感じていた孤独感が解消された。
5	親子関係を見つめなおす機会	・ 自分のコーダ観や親との関係を見つめ直すきっかけになりました。 ・ 他のコーダの意見、親側の考えていることを肌でリアルに感じたことで、自分の親と素直にじっくり話そうという気持ちになれました。

②親版：本実践から、4つのカテゴリー（①子育ての不安払拭の機会、②エンパワメントされる機会、③CODAの気持ちの理解の機会、④子育てのヒントを得る機会）が見出された（Table3）。親版も、いずれもポジティブと捉えられるカテゴリーといえた。支援プログラム親版では、きこえない親がCODAの心理的状況を理解し、自身の子育てを見つめ直すことで諸課題を解消することを目的としている。本結果から、親版は、その目的を達成し得る内容構成であることが伺えた。

Table3 支援プログラムの感想：自由記述のカテゴリー分類（親）

No.	カテゴリー名	主な記述
1	子育ての不安払拭の機会	・ 果たして我が子が手話を覚えてくれるのか、親子の会話は成立するようになるのか不安でしたが、CODAの方々から、成長するにつれて語彙力も上がって話し方なども変わったというお話でなんだか少し安心しました。
2	エンパワメントされる機会	・ 子育てのエネルギーとなりました。
3	CODAの気持ちの理解の機会	・ CODAのいろんな考え方を聞けてとても良かったです。辛かったことも良かったことも全て 勉強になります
4	子育てのヒントを得る機会	・ ありのままの自分でいいと自己肯定感を高めていくこと、また、CODAの子達にとっての 居場所を作ることが大事だと認識しました。

#### (5) 支援プログラムの今後の展望

当支援プログラムは、今後も研究代表者を主体に、CODAや親の当事者団体と共同事業化するなどの方法で継続実施していく。ポストコロナ時代に適した形式で、対象者数や開催数を増やすなどして、量的分析でも効果を示せるようにしたい。加えて、対象者の年代や属性に応じて少しずつ改編した版も作成し、コンテンツを精緻化させ、全国各地で実践展開が可能なくみを構築する。本研究では、CODAと親にアプローチする支援プログラムであったが、社会に働きかけるプログラムの開発を今後の課題としたい。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 0件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 中津真美	4. 巻 138
2. 論文標題 聴覚障害の親をもつ聞こえる子どもの自助グループにおける取り組み	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 社会福祉研究	6. 最初と最後の頁 77-85
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計6件（うち招待講演 3件/うち国際学会 0件）

1. 発表者名 中津真美
2. 発表標題 教育、福祉、医療等の現場の実践を見据えた実践研究の在り方-多様な個をみつめる質的研究の展開と深化に向けて-
3. 学会等名 日本特殊教育学会 第60回大会（招待講演）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 中津真美
2. 発表標題 高等教育機関における障害学生支援 合理的配慮とはなにか
3. 学会等名 日本リハビリテーション連携科学学会 第24回大会（招待講演）
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 會田 純平, 三浦 貴大, 藪 謙一郎, 中津 真美
2. 発表標題 聴覚障害者のレジリエンス獲得要因: 当事者同士の関わりの構築に着目して
3. 学会等名 日本リハビリテーション連携科学学会 第24回大会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 中津真美
2. 発表標題 バイリンガルの世界ーコードへの誘いー
3. 学会等名 第1言語としてのバイリンガリズム研究会第22回研究会（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 中津真美
2. 発表標題 聞こえない親をもつ聞こえる子ども コードが考えるアイデンティティ
3. 学会等名 第3回コード自主研究会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 安東明珠花，中井好男，中島武史，中津真美
2. 発表標題 コードの手話継承
3. 学会等名 言語文化教育研究学会 第8回年次大会
4. 発表年 2022年

〔図書〕 計5件

1. 著者名 中津真美	4. 発行年 2022年
2. 出版社 青土社	5. 総ページ数 246
3. 書名 ヤングケアラーの中のコード：聞こえない親をもつきこえる子どもの通訳の役割	

1. 著者名 桑原斉、中津真美、垣内千尋、熊谷晋一郎	4. 発行年 2022年
2. 出版社 金子書房	5. 総ページ数 168
3. 書名 障害学生支援入門	

1. 著者名 菊澤律子・吉岡乾	4. 発行年 2023年
2. 出版社 文理閣	5. 総ページ数 326
3. 書名 しゃべるヒト ことばの不思議を科学する	

1. 著者名 中津真美	4. 発行年 2023年
2. 出版社 金子書房	5. 総ページ数 160
3. 書名 コーダ：きこえない親の通訳を担う子どもたち	

1. 著者名 澁谷智子	4. 発行年 2024年
2. 出版社 生活書院	5. 総ページ数 208
3. 書名 コーダ 私たちの多様な語り 聞こえない親と聞こえる子どもとまわりの人々	

〔産業財産権〕

〔その他〕

CODAコーダのページ きこえない親をもつきこえる子ども  
<https://marblemammy.wixsite.com/coda-and-parent>

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------